

〔研究論文〕

若年教師の学級経営に関する課題の究明

—アセス調査と教師の子どもへの言葉かけの調査を通して—

Demonstration of Obstacles in A Young Teacher's Class Management
-Focusing on ASSESS Analysis and Communication Process with Students-

山 本 克 代

Katsuyo YAMAMOTO

脇 田 哲 郎

Tetsuro WAKITA

福岡教育大学大学院教育学研究科
教職実践専攻生徒指導・教育相談
リーダーコース／嘉麻市立山田中学校

福岡教育大学大学院
教育学研究科教職実践専攻

(2017 年 1 月 31 日受理)

若年教師の学級経営において、①人間関係を形成する力や②コミュニケーション力を育成する能力は不可欠である。生徒は学級に所属し、教師の影響を受けながら毎日の生活を繰り返す。教師は子ども達の成長に果たす大きな影響力があることはこれまでも述べられてきている。しかしながら、若年教師の担当する学級において円滑な学級経営が必ずしも行われているわけではない。そこで、円滑な学級経営が行われていない原因を探り、若年教師の学級経営力を向上させることを目的にコンサルテーションを行った。支援の結果、若年教師は、子どもとのコミュニケーション能力の向上や子ども理解をはじめとする学級経営の機能的な側面を改善できたことが分かった。そこで、自己の振り返りを基に若年教師の気づきを促し、生徒指導の機能を充実させて当該校の課題を解決する。

キーワード：若年教師，学級経営，コンサルテーション，コミュニケーション力

1 問題と目的

在籍校の若年教師には、安定した学級経営ができていないという課題がある。ここでいう安定した学級経営とは、「子ども理解」を基盤とした望ましい集団生活を通して「学習指導」や「生徒指導」、「健康・安全指導」等を中心とした機能的側面と、「教室環境」や「家庭との連携」「情報発信と管理」等教育活動を充実させるための条件的側面の両側面が機能していることである(福岡市教育センター, 2011)。特に若年教師の場合、生徒指導上の人間関係に起因した機能的側面に問題が発生し、その対応に多

くの時間を費やしている。このような状況が見られるのには、次のような背景が考えられる。それは、初任者の時は指導教諭が指導を行い、定期的な研修で学級経営をはじめ教科指導についても適切な指導が行われる。3 学期を無事に終えることができたのは、二人三脚のようにして研修を終えるからである。しかしながら、2 年目になると指導教諭に頼ることなく独り立ちが求められる。このような教師の中には、学級を任せることが難しい教師もいる。学習指導と学級経営は生徒指導の両輪でありながら十分に機能していない場合があり、十分に機能しない場合、それが生徒のあらゆる問題に直結する可能性となる。

望ましい集団生活、よりよい学級作りについては、子どもたち相互や教師と子どもたちが、学校生活の多くの時間を学級という集団で過ごすにもかかわらず、学級経営について学ぶ機会を実際教師になってからのことが多く、経験的な学びが多い。長瀬(2014)は学級経営について大学で学ぶことは少なく、特別活動や生徒指導、教育相談などの個々の分野は学ぶものの、集団としての学級をどのようにまとめていくかといった学級集団作りについてはあまり学ぶ機会がないと指摘している。

教員の資質能力向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果(文部科学省, 2010)では、初任者教員の資質能力の充足度について、「やや不足している」「とても不足している」の割合が6~7割とかなり厳しい結果となっている。全国の校長による評価で、集団指導の力・学級作り・児童生徒指導力について質問した結果である。このようなことから、若年教師の学級経営力を向上させることが急務で、そのためには、初任者研修に続く継続した支援、学級経営の向上に向けたコンサルテーションが必要となる。コンサルテーションとは、異なった専門性や役割を持つ者同士が子どもの問題状況について検討し、今後の援助のあり方について話し合う作戦会議であり、二人の専門家(一方をコンサルタント[consultant], 他方をコンサルティ[consultee]と呼ぶ)の間の相互作用の一つのプロセスである(石隈, 2004)。

今回は学級活動(2)による体験活動や話し合い活動を通して、生徒理解の視点をすることで生徒理解を深め、教師の子どもへの言葉かけによる教師のコミュニケーションの傾向を分析することにより、若年教師の学級経営の課題が何かを明らかにすることを目的とする。

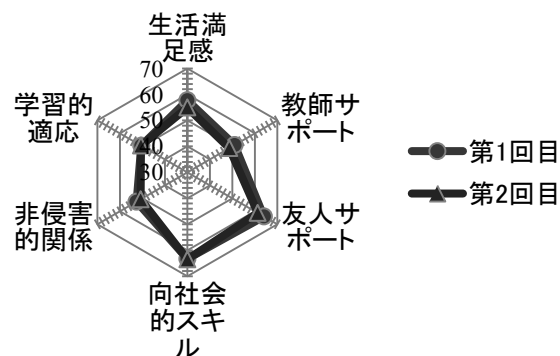
2 研究内容の概要

研究Ⅰ 学校環境適応感尺度(ASSESS)調査

- (1) 調査期間：平成X年5月～平成X年12月
- (2) 調査対象：福岡県内の公立中学校1校の生徒
A組25名、B組25名
- (3) 尺度評価：学校環境適応感尺度(栗原・井上, 2013)
体験や話し合いに関する質問紙と、
記述式によるアンケート調査
- (4) 実施の手続き：若年教師の学級の生徒を対象に、学級活動(2)を通して教師の関わり方が生徒に与える影響と教師が生徒を見取る視点につい

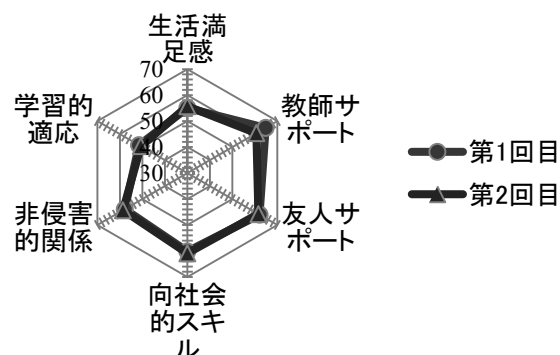
(5) 結果

表1 A組におけるアセスの結果



適応次元	5 月	7 月
生活満足感	58	55
教師サポート	51	49
友人サポート	64	61
向社会的スキル	63	63
非侵害的關係	53	51
学習的適応	50	51

表2 B組におけるアセスの結果



適応次元	5 月	7 月
生活満足感	55	56
教師サポート	65	61
友人サポート	62	62
向社会的スキル	60	61
非侵害的關係	58	59
学習的適応	51	51

ての傾向を分析した。1学期初めの5月と終わりの7月に実施した学校環境適応感尺度(以下ASSESS)は、生活満足度、学習的適応、対人的適応(教師サポート、向社会的スキル、友人サポート、非侵害的關係)の3つの観点から学校適応感を捉える。5件法で尋ね、数値が高い方が適応感も高いと見る。ASSESSの結果から、教師サポ

ートについて、A組とB組を比較した。(表1、2)A組は初任から3年目以内の若年教師、B組は担任の経験が浅い講師である。A組の51→49に対して、B組は65→61という結果だった。教師サポートとは、生徒は担任が自分を気にかけてくれている、認めてくれている、理解してくれていると思っている割合である。どちらも2ヶ月の間に下がっているが、A組の数値は49と50を下回る結果となった。さらに、非侵害的関係の値では、B組は58→59と向上しているのに対し、A組では53→51と下がった。非侵害的関係とは、友達は自分を仲間と思っており、からかたりされていないと思っている可能性が高い値である。以上のことより、学級Aは学級Bと比較すると学級経営の支援を必要とし、生徒同士や教師と生徒の人間関係づくりに課題があると言える。

学級活動後の結果

学級に侵害的関係にある生徒が存在し、教師サポートが下がっていることを理由に、学級経営の課題を究明する必要がある。なぜなら、これらの要因からいじめが発生していたり、不登校の契機となったりするからである。そこで、生徒が学級の人間関係を改善する一手段として、体験活動を用いた。その中から学級の課題を発見し、話し合いを通して解決していく手段として、学級活動の指導法を支援した。体験活動としては心理教育プログラムの1つであるプロジェクトアドベンチャー(以下PA)の体験活動を行った。PAでは集団のルールを守り、ウォーミングアップの活動やゲームを通して心の安心・安全を獲得し、チームとして活動にチャレンジして達成感を得ることができる。ところで、活動は専門のファシリテータが行うため、学級担任としての役割は、記録することで子どもの活動を観る視点を獲得することに焦点化した。

PA記録シートとは、PAの活動を通して、学級がチームとして成長する姿とこれから学級担任として解決すべき学級の課題を明確にするものである。活動前の学級の課題や担任の願いを予め示し、活動を通してグループの変容や今後の学校生活についての気づきを実際に見て記録する。体験活動のよさは、グループの変容が目で見えて分かることにある。行動面だけでなく、感情面についても記録できる。1学期の学年でのPA活動の折に、自らが挑戦する意欲を持って取り組めていない生徒がいるということに担任は気づいていた。学級の実態が詳細に分かる今

表3 PA記録シート

PA 記録シート		年 A 組	
日付	平成 X 年 月 日 ()	記録者 ファシリテーター	学級担任
学級の課題	自らが挑戦する意欲を持って取り組めていない生徒がいる		
担任の願い 感情面の記録 2-10 123	安心や他者に係わりようとする雰囲気を作りたい。		
	【グループの様子チェック】		
1 活動名【かるがも母さん(狼と羊)】	1	✓	笑顔がある
活動内容: グループメンバーの一人の狼から、肩に手を置いてつながる 2 番目以降のかるがもの子を先頭の母さんが守る。攻撃はグループ内とどこでもの 2 パターン。タッチされたら狼と交代。		✓	笑い声がある
・身体接触に課題のあるクラスであるが、班内の接触は男子→女子でできていた。		✓	よかったときに拍手する
・柔道部の 2 人は完璧に子どもたちを守ることができた。		✓	握手をすることができている
・FVC の確認として、一生懸命にやれば並んで遊ぶだけで楽しいということ、一生懸命になりすぎて転んだり走ったりと、ルールが守れない危険なときは改善することを体験から言葉で意味づけ。		✓	ハイタッチができる
2 活動名【ペーパータグ・みんなおに】		✓	アイコンタクトができる
活動内容: 4 つ折りした紙を手の甲に乗せて鬼ごっこをする。タッチされたら座る。復活のルールを加えた場合、友達を助けることができる。		✓	誰でも手をつなぐことができる
・修学旅行に向けて、「2 組のチームでより楽しむために自分がしなければいけないこと」を A 5 の用紙に書いて、手の甲にのせて動く鬼ごっこ。		✓	身体的な接触をすることができている
・目標が書けなかった生徒には、無理に書かせず「目標がないということはこれから考えるということとそれでもいい」と、安心感を持たせる声かけを。		✓	2 人で話をしている
・一生懸命になりすぎて安全にできない場合を想定して、事前に手で指さし目で見えて危険な方向の確認を活動前に行った。		✓	3 人以上で話をしている
3 活動名【キーパンチ】		✓	名前を呼んでいる
活動内容: 枠の中の 1~40 の数字を順番にタッチしていく。何人枠の中に入ってもよい。1 人必ず 1 回はタッチする。		✓	返事をしている
・作戦 5 分→実践→作戦 5 分→実践→作戦 3 分→実践の計 3 回のチャレンジでタイムを縮める。		✓	全体に声かけしている
・実践 2 回目に観察対象生徒はタッチできなかった。		✓	声かけに反応している
・話し合いと、グループの形態には関連がある。		✓	自分から行動しようとしている
		✓	恥ずかしがらずにやってみる
		✓	失敗しても諦めない
		✓	相手に助けを求めることができる
		✓	失敗しても笑いにしない
		✓	上手く(成功)できたらほめる
		✓	行動が大切という雰囲気がある
		✓	自分の意見を言える
		✓	人の意見に耳を傾けて聞ける
		✓	相手の気持ちを考えられる
		✓	みんなの行動を話し合いで決められる
		✓	みんなの目標を決める
		✓	話し合いが大切という雰囲気がある
		✓	成功が失敗を気にせず努力する
		✓	困難でも最後まで努力する
		✓	リーダーシップを発揮する
		✓	協力的である
		✓	決まりを守って行動している
		✓	課題意識を持って行動している
		✓	みんなで行動することが大切という雰囲気がある

グループの変容や今後の学校生活についての気づき
最初の話し合いでは学級内にグループが 4~5 個あり、活動を通して 2~3 へと統合してきたが、まだまだ前回の活動で指摘された温度差を克服できない状態。特定生徒への関わりに課題がある。公共心・公徳心

回の学級単位の活動では、担任の願いとして、安心や他者に関わりようとする雰囲気を作りたいと思っていた(表3)。グループでの活動を通して、最初は学級内にグループが 4~5 個あり、活動を通して 2~3 へと統合し改善してきたが、1 つの大きな輪になることはなかった。まだまだ前回の活動で指摘された温度差を克服できていない状態であった。特定生徒への関わりに課題があり、友人サポートが減少した課題と侵害的関係の理由を、担任として生徒に公共心・公徳心が欠けているのではないかという見取りをしている。その根拠として、グループの様子チェックより、お互いを承認する拍手などの行動が自然に発生することがなく、特定の生徒と握手などの接触を躊躇する場面も見受けられた。全員が 1~40 までの数字に 1 回タッチし時間を計するという「キーパンチ」の活動では、ある生徒がタッチしていないにも関わらずそのルール違反にも気づかない学級の雰囲気があり、失敗に対して、次のチャレンジを頑張ろうとする意欲よりも、どうすべきか一部の生徒の意見に左右され、全体での合意形成が難しかった。前回の活動においても学級の成員間の活動に対する温度差を指摘していたが、その困難な課題を克服できずに今日に至っていることに教師自身

表 4 体験活動と話し合い活動における自己認識

	楽しさ	積極性	協力	安心	ルール
A 体験	3.7	3.6	3.6	3.6	3.9
B 体験	3.8	3.6	3.6	3.8	3.8
A 話し合い	3.2	3.6	3.6	3.7	3.8
B 話し合い	2.8	3.4	3.4	3.6	3.8

も気づかずにはいられなかった。公共心とは公共のためを思う心、公德心とは社会の利益を図ろうとする精神、社会生活をする上で守るべき道徳である。つまり、学級の一員としての自覚に基づき、活動のルールやマナーなどみんなの利益を守ろうとする心の成長を促すことがこの学級には必要であると意識した。さらに、活動における課題を学級会での話し合いで実践することがこの学級における課題であることにも痛感し、コンサルテーションを行った上で、生徒主体の学級会を実施することとした。

活動を通した生徒の感想

体験活動に対する「楽しさ」「積極性」「協力」「安心」「ルール」について4件法で質問し、結果は表4の通りとなった。

A組とB組の共通点は、話し合い活動よりも実際の体験活動で楽しさを感じたことと、ルールを守ることにおいて最も高い値を示していることだ。一方大きな違いは、体験活動では安心がA組よりもB組の方が高かったが、話し合い活動においては、A組の方が高かったことである。話し合い活動において、生徒の心の交流が行われ、「体験から学ぶ」特別活動の本質に迫る生徒の気づきがあった。よって、その後の生徒の話し合い活動に生徒は必要性を感じ、学級の課題、個人の課題として相互の交流を繰り返し広げながら、意思決定を行っていった。「協力」と言葉で言うことは優しいが、実際に行動を通して見えた協力できない場面を写真でふり返り、それぞれが自己の気づきを表5のように表現した。

これらの気づきを実際の取組の中で活かすために、修学旅行の2泊3日の間、各自が意思決定した行動目標の評価を行った。それぞれが決めた目標ごとに平均を求めた。学級活動においては、よりよい学級作りのために見つけた課題をみんなで話し合う。それぞれが体験を通してしたこと、考えたこと、感じたことを内言化し、話し合いの場面で外言化してお互いに交流を行う。交流の中で他者と自分の意見の違いを知り、それぞれのよさを知って、自分ができることを行動目標として意思決定する。学級活動においては、行動したいと思う段階ではなく次の段階で実際にその行動をするかどうかということが

表 5 各項目における生徒の自己の気づき

○楽しさについて

・一人でやるよりみんなでした方が楽しい。・1回目はタイムが長かったけど、その後に作戦を立ててしたらタイムが短くなった。・協力したりすること。みんなのことを考えること。・一人ひとりが考えて動くことで何倍にも楽しくなると言うことが分かった。・楽しかった。協力した。・みんなと遊ぶと楽しい。やはり協力は必要。

○積極性について

・温度差が少しあるなと感じました。けれど前よりはよかったです。・輪に入ろうとする人とならない人がある。力を合わせれば何でもできる。・やっぱり、楽しみたいと思っている人と最初から「やだ」と思っている人では温度差があると思った。

○協力について

・協力する大切さを知りました。協力しないと成功しないことがあるので、協力は大切だなと思った。・みんなで話し合ったり協力したりすることが大切だなと思った。・みんな今まで以上に協力していたので、よかったです。けど、ちょこちょこばらばらになっていた。・みんな誰とでも協力して仲良く関わっていた。・一生懸命やって協力して疲れるまですると、気持ちがいいくらい楽しいということ。・やっぱり協力は大事！

○安心について

・自分が安心して取り組めたことで、協力って大事だと思いました。・皆が協力できていたので安全に活動できていて、楽しそうだった。みんなと協力することは安心につながる大事なことだなと思った。

○ルールについて

・みんなが一団になっていた。ルールを守れていた。・楽しめば、みんな一生懸命に取り組むと分かった。グループに分かれずにする。

重要である。学校行事の修学旅行での実践として、毎日の学級会で自己評価を数値化した。項目は以上の5つに集約され、それぞれを目標とした生徒の平均値を示している(表6)。1日目の学級行動、2・3日目の班ごとの自由研修とにもよい実践の機会となったことが分かる。「自ら進んで行動」や「協力」が10.0を示した。知らない場所を自分たちで計画・実行・振り返りながら計画した通りに実行できたという自信につながる自主的・主体的な行動を実践した成果である。

3日間の活動を共に行うだけでなく、宿泊も伴うため、友達について知り合う、関わりを深めるよい機会でもある。相互理解が深まったといえる。また、協力とは何かと問われて、「声かけすること」と答えていた協力するための1つの要素である声かけについても高い数値を示

表 6 目標の種類と達成率(10 点満点)

声掛け	9.8
当事者意識(温度差をなくす)	8.5
自ら考えて進んで行動	10.0
協力	10.0
知り合う、関わりを深める	9.9

している。また、学級の課題である「当事者意識(温度差をなくす)」は、少しずつ改善を見せてはいるものの、今回も他の項目と比較すれば数値は低く、生徒自身が前々回よりも前회가、そして前回よりも今回とクラスの成長を感じてはいるが、まだまだ達成できていない課題として意識した数値となっている。

学級活動(2)の指導計画から、事前の活動として、PAの体験活動について、計画委員会でクラスの実態に合わせた内容を検討する。さらに、プロジェクトアドベンチャーの体験活動から、クラスの課題を発見する。次に、本時の活動として、体験活動を通して見えたクラスの課題を話し合い活動で確認し、行動目標を自己決定する。事後の活動として、修学旅行を通して、クラスの課題を改善できたかどうかを評価した結果である。学級の課題である当事者意識(温度差)にはまだまだ課題は残るものの、声掛けや、2泊3日を同じ乗り物や部屋で過ごすことにより関わりを深め、お互いを知り合うことができた。また、班別自主研修やスタンプ(各学級の出し物)を通して協力することや自ら考えて進んで行動することを身に付け、教師主体の関わりから生徒同士の関わりへと移行していったことが伺える。

研究Ⅱ 朝の会の発話記録

- (1)調査期間:平成X年5月～平成X年11月
- (2)調査対象:福岡県内の公立中学校1校の若年教師として1名
- (3)尺度評価:質問紙と記述式によるアンケート調査、発話記録
- (4)実施の手続き:若年教師を対象に、生徒とのコミュニケーションの様子を録画し傾向を分析した。
- (5)結果

表7は朝の会10分間の内、先生の話や特に説明をしている場面を3分間に区切って、記録した。表8はその発話内容を分類したものである。

1 学期末においては、繰り返しや確認・指示が多く、生徒を賞賛する場面は見られなかった。また、私語をしている生徒への注意や叱責もあり、生徒が理解し難い言語の使用も見られた。

表 7 朝の会の発話記録(5月)

(T1)もううるさい。個別の質問は後にします。もう遊んでいる時間がない。
(T2)この希望取りは、あなたが今回の補充学習に参加するとして参加する場合に、学習したい教科は何ですか?学習したい教科から順に番号を付けてください。
(T3)先生、〇〇の教科やったら先生でしょう。
(T4)ということになります。
(C1)よっしゃ。
(T5)A先生は一応3年の所属の先生なので、で2年生はA先生とB先生とどちらになるかわかりません。1, 2, 3, 4, 5と書きます。絶対書かないけん。
(T6)わかりますか、〇〇君間違えないでくださいね。あなたこれはいいかなと一番だけつけないでください。1, 2, 3, 4, 5と全部つけます。あなたたまにやっちゃいますからね。これとこれはいいかなと2くらいで止まってしまわないでくださいね。班長さんは書かせてください。班長さん書かせてください。
(T7)先生1つですか?
(T8)1, 2, 3, 4, 5したい順番から、それをだけん班長に聞いて。
(T9)はいでは、回収のくだりに行きます。みんな顔を上げて聞いてください。回収のくだりに行きます。各班の学習係の人が全員書いているのを確認して持ってきてください。持ってくるのは私のところまでお願いします。

表 8 発話記録における分類

	発言内容	回数
1	注意・叱責	6回
2	繰り返し	15回
3	説明	3回
4	確認・指示	16回
5	難語の使用	2回
6	賞賛	0回

そこで、朝の会の様子を文字化したものを提示し、他の教師の発話記録と比較させながら本人の気づきを促した。この際、報告者がコンサルタント、若年教師がコンサルティと位置づけた。コンサルティの抱えている問題を仕事の中でよりよく解決できるよう援助する関係である。コンサルタントとして配慮したことは、できるだけコンサルテーションで気づきを伝えるのではなく、コンサルティ本人に気づかせることである。そのため、「はい」や「いいえ」では答えられないオープンエンド型の質問の工夫もした。文字化したことで、繰り返しの発言が多いことに自分で気づくことができた。しかしなが

ら、難語の使用については、自分自身で気づいていなかった。それまで本人は難しいとは思っていたことがなかったためである。中学生には難しいと思われる言葉の使用が、生徒には理解できていると考えていた。生徒が理解できていないということが分からない。生徒は自分の発話を全て理解しているものだという一方的な考え方では、生徒理解が進まない。そのため、11月終わりに再び朝の会を観察した。文字化したもの

表 9 朝の会の発話記録(11月)

- (T1)今日の連絡、今日の連絡であったように、今日までに終わらないと残らないといけません。考えて行動してください。はい。
- (T2)先生、先生。(教師は後ろから前へ移動し、質問した生徒に近づいて)
- (C1)2人来てないけど、どうしたらいいんですか？3人でいいですか？
- (T3)病院に行ってるから、,,,(教卓に移動)
- (T4)はい、司会進行してください。
- (C4)提出物です。
- (T5)(黒板に指示棒でカチカチカチと3回示して特定の生徒に提出を促す。次は5回示す。)
- (C5)先生放課後スタンツのメンバーは行かないけないんですか？
- (T6)「うん」とうなずき、再び指示棒で5回示す。(大声で注意することなく、司会生徒が今日の連絡をノートを見てみんなに伝える。金曜日の時間割変更を言った後、)
- (C6)はあ、今日？
- (C7)金曜日
- (C8)はあ？まだやん。
- (C9)びびった。
- (C10)そういうの明日言えばいいやん。
- (C11)書いてあるんやもん。
- (C12)分かった。
- (T6)放課後、修学旅行実行委員をします。係長とスタンツリーダー代議員は先生の所へ行ってください。(教師は後ろから前に来て再び後ろへ移動)
- (C13)先生、〇〇は行かんでいいでしょう？
- (C14)提出物を出してください。

表 10 発話記録における分類

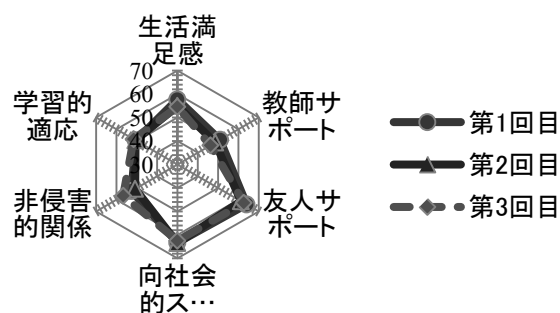
	発言内容	回数
1	注意・叱責	0回
2	繰り返し(動作も含む)	5回
3	説明	1回
4	確認・指示	4回
5	難語の使用	0回
6	賞賛	0回
7	無視	1回

を提示し、前回との比較から気づきを促した。発話記録の文字化を5月と11月で比較すると、1回目に多く見られた言葉の繰り返しや確認・指示は減り、一般的ではない言葉の使用も含めて、自己の発話の特徴に気づくことができたため、本人は改善できるようにしたいと意欲を示した。2学期になり、6ヶ月の期間を置いて、注意・叱責が大幅に減っていた。さらに、注意や叱責をする代わりに、しゃべらないことによる無視を使い、またはジェスチャーを使い、教師の声でその場が騒がしくなることを避けていた。ただし、無視は生徒が聞いた内容には答えていないため、朝の連絡のようにその日の行動に重要な内容の場合は板書するようにし、全ての生徒が情報を共有できる配慮が必要であることを伝えた。本人の気づきとしても、大きく改善していることを挙げ、自己の成長への気づきがあり、今後のよき努力につながる動機付けとなった。

3 結果と考察

ASSESSの12月の結果では、友人サポートが61→63、非侵害的關係が51→57へと変化が見られた。「仲が悪くても仲良くする」「仲が悪くても少しずつ話したりする」という目標を立てた生徒がいた。仲が悪くてもという言葉から、同じクラスの中で、お互いが侵害的關係にあったことは事実だ。しかしながら、人間関係を向

表 11 A組におけるアセスの結果



適応次元	5月	7月	12月
生活満足感	58	55	55
教師サポート	51	49	46
友人サポート	64	61	63
向社会的スキル	63	63	62
非侵害的關係	53	51	57
学習的適応	50	51	52

上させるスキルは子どもたち同士の取組の中で改善させることはできる。実際に、表 11 の結果が示すように非侵害的関係が向上した。いやがらせやからかいなどが減り、クラスの仲間意識が深まった結果である。一方、向社会的スキルの向上の 1 つである、教師サポートについては数値を減らす結果となった。クラスが成長するにつれて、教師のサポートは変化することもあり、マイナス要因だけではないとも考える。

教師の変容

コンサルテーション後の感想（表 12）から、教師と子どもとの人間関係の変容が読みとれる。子どもとの人間関係が形成される中で、子ども同士や教師と子どもの信頼関係が確立されている。確認や指示の多さは、教師が生徒を信用していないという事実気づいた。生徒に対する注意も減り、待つ姿勢もできて、子どもとの良い人間関係を作ろうとしている。若手教師には、自分に興味がある生徒という発言があるが、子どもへの関わりについて、小泉(2010)は子どもから見た教師との人間関係は全員同じではなく、子どもによる個人差がある。同じ教師に対して、親しみを覚える子どももいれば、何となく気が合わないあるいは嫌いだという非好

表 12 コンサルテーション後の感想

- ・繰り返しの言葉が減った。子どもたちが理解できるかどうかかわからないような難しい言葉の使用も減った。
- ・全体指導の場で、自分に興味がある生徒が発言し、それに応答していたが、生徒の発言が減り、答える必要がなくなった。
- ・生徒に対する注意が 11 月は全くなかった。生徒同士でお互いに注意ができる関係になって、必要がなくなった。キーパーソン、よきリーダーの育ちがあった。
- ・説明の言葉が減り、説明を何度もしなくても生徒との人間関係ができた。
- ・発話がストップされた時、教師の指示と説明が途切れた時、「静かにしなければならない」という隠れたカリキュラムが形成された。
- ・確認や指示が多いのは生徒を信じていないからだと思う。生徒が分からないと思っているからかもしれない。
- ・聞いて理解しにくい生徒には、朝の連絡ノートを準備して見て確認できるようにしている。
- ・2 回とも承認や褒め言葉がなかったことに気づいた。生徒との人間関係を改善させるためには、「愛情」が必要だと思う。「ありがとう」という言葉を増やしたい。

意的な印象を持つ子どももいる。まず、教師は、こうした発達差や個人差の存在を適切に知っておく必要があると述べる。つまり、生徒とのよりよい人間関係作りにはこのことを知った上で、教師が生徒を通して自分自身を知ることが重要である。生徒の行動をしっかりと観察し、生徒の力を信じることで承認や褒め言葉も増えてくるであろうと推察する。

生徒の変容

学級活動の事前の活動として、計画委員を組織し、班単位で司会や書記などの係分担をした。小学校の時には経験したことがある活動だったが、中学校ではその活躍の場を学級担任が主に一人で担っていたため、今回の話し合いは自分たちで行った自主的・主体的な活動となった。初めての取組で戸惑うこともあったが、事前の活動として、計画委員がプロジェクトアドベンチャーの体験活動から、クラスの課題を発見する。体験活動を通して見えたクラスの課題を話し合い活動で確認し、行動目標を自己決定する。修学旅行を通して、クラスの課題を改善できたかどうかをこれらの過程を通して評価した。

これらのことから、学級の問題は改善した。つまり学級の成長が見られた。学級が成長するためには、問題が何もないことが最善ではない。伊藤ら(2015)は、望ましい人間関係能力と人間関係形成能力の育成との関係は、望ましい人間関係がなければ人間関係形成能力は育たない。小さな衝突で一時的に人間関係が乱れ、望ましい人間関係は悪化する。しかしながら、衝突を克服すれば人間関係形成能力が育ち、人間関係も以前よりよくなることから、人間関係形成能力は向上すると示している(図 1)。

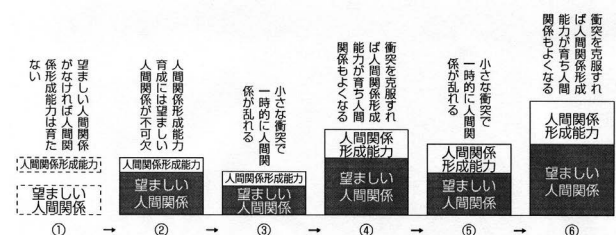


図 1 望ましい人間関係と人間関係形成能力の育成との関係

この望ましい人間関係と、人間関係形成能力の育成のプロセスを繰り返しながら学級は育って行く。その育ちを支えるのが教師の役割であり、学び続ける教師として生徒を育てていく教師の力量が問われる。集団をつくり集団の中で一人ひとりの個を育てる。その個の育ちには集団は不可欠で、生徒と共に一人の人間を育てる

視点から、教師の関わりは非常に重要である。一言ひとことの言葉の重みを感じながら、目の前で実行されている行動のよさを言語化し生徒への気づきを与える。ほめる、待つ、教師の影響力は大きい。

若年教師はコンサルテーションを通して、隠れたカリキュラムの存在に気づいた。伊藤ら(2015)は「隠れたカリキュラム」として、時間の経過に伴い、その学級特有の雰囲気を持つようになってくる。集団は同じ状態に留まることはなく、教師の指導によっては、成熟するか退行する(発達段階が下がる)かの変化を遂げていくと指摘する。このように、学級集団の組織化には、教師のリーダーシップ行動が大きな影響を持っている。教師が静かにしたら生徒も静かにする。生徒は聞く姿勢ができる。言葉で説明すれば簡単なことであっても、若年教師には無理に聞かせようとして、注意・叱責をしてしまう傾向にあった。さらに、非侵害的関係の数値が1学期に下がった現実に対して、教師が注意や叱責を多く用いて生徒指導を行えば、いじめを未然防止するための授業や活動を行ったとしても、果たしてそれが効果を発揮したかどうかは疑問である。このことを鈴木(2016)は、教師の日常的な指導や関わりがいじめを助長するようなものであれば効果が減少してしまうと考え、教師の日常行動や指導態度からいじめの未然防止に取り組んでいく必要があると述べている。

コンサルテーションとしての担任への支援として、阿部(2014)は、支援を行う際には、学級が現在どのような状態であり、何を目指しているのか、目標・ゴール像をもった戦略的な計画を学級担任と協同して作成する必要があると述べている。このことを今回の支援と重ねると、まずは学級の現状を見る視点、感覚的ではなく、実際に目の前で繰り広げられている生徒同士の体験活動や話し合い活動、さらには教師の発話の分析により、教師が生徒に与える影響などを俯瞰的に眺める作業を通して、教師自身の振り返りや自己を見つめる機会となったことは確かである。

コンサルタントがコンサルティに支援を行う際の重要な視点は、コンサルタント自身の省察、自己の振り返りを通して、過去に報告者が経験した同じような失敗や経験を伝え、コンサルティが自分ならこう乗り越えたいという意欲を持つこと、まずはやってみるという体験(経験)学習サイクルを用いた、振り返りを共に行う相互

作用のコンサルテーションが非常に重要である。コンサルティの行動に対して、意味づけ価値づけすることで、客観的に自分を見つめることができる考える。学校はチームとして教育活動を行っている。チームの目標達成のためには、教師自身が努力を認められる体験を通して、周りからの承認を得ることで、生徒をほめる、待つ姿勢ができてくるであろうと推察される。コンサルテーション後の若年教師の感想には、生徒の人間関係を改善させるためには「愛情」が必要であること、そして生徒とのコミュニケーションで「ありがとう」という言葉を増やしたいという言葉が述べられていた。

今後の課題として、今回のコンサルテーションは1人の若年教師に行ったため、多くの若年教師の傾向とはならなかった。よって今後は学校の課題解決に向けて、より多くの若年教師の学級の課題を明確にしていきたい。

引用文献

- 阿部琢郎・赤坂真二 2014 学級集団づくりを志向する担任への効果的な支援のあり方に関する研究 上越教育大学教職大学院研究紀要 1, 1-12
- 福岡市教育センター 2011 学級経営を充実させるために 石隈利紀 2004 学校心理学ハンドブック 日本学校心理学会
- 伊藤文一・柴田悦子 2015 生徒の人権感覚を高める特別活動についての一考察 学級集団づくりにおける教師のリーダーシップ行動に着目して 福岡女学院大学人文紀要 25, 53-77
- 小泉令三 2010 よくわかる生徒指導・キャリア教育 ミネルバ書房
- 文部科学省 2010 教員の資質能力向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果
- 長瀬拓也 2014 ゼロから学べる学級経営 明治図書
- 鈴木文哉・赤坂真二 2016 いじめが起きにくい学級をつくる教師の働きかけに関する事例研究 集団作り導入期における教師の指導行動に着目して 上越教育大学教職大学院研究紀要 3, 1-10
- 上地幸市 2014 教職を目指す学生とともに創る特別活動の授業実践 学び合い、高め合う学級集団づくりの一提案 沖縄大学人文学部紀要 16 71-77

謝辞

本研究をまとめるにあたり、格別にご配慮いただいた先生、並びに協力していただいた全ての先生方へ、心より感謝申し上げます。